

保育者養成短期大学の多様性を見据えた 授業や行事（活動）の取り組み

植草 一世	長嶺 章子	堀 彰人	田村 光子
松原 敬子	根本 曜子	相磯 友子	久留島太郎
山本 邦晴	佐藤 慎二	中澤 潤	

A Consideration from the Class Activities of Junior College for Training of Childcare Workers : To Correspond to Various Needs of the Society

UEKUSA Kazuyo NAGAMINE Akiko HORI Akihito TAMURA Mitsuko
MATSUBARA Keiko NEMOTO Yohko AISO Tomoko KURUSHIMA Tarou
YAMAMOTO Kuniharu SATO Shinji NAKAZAWA Jun

近年本学で行われてきた保育者養成における多様性を見据えた授業や行事（活動）について検討した。本学の特色となる、子どもの多様性を理解し、それを踏まえた保育の展開を促す意味で、これまで教員はそれぞれインクルーシブ保育の学びを授業にとりいれる等、授業や行事（活動）を工夫してきた。本論文ではそれらの授業を示すとともに、今年さらに展開された本学の学内にあるビオトープ「植草共生の森」を活用した活動による、学生が自分自身の感性を磨き本質に触れる等、学びの質を視野に入れた授業を示した。本研究は、このような短大教員の専門性を活かした様々な授業や活動はバラバラに存在するのではなく、学生が多様な人や子どもと付き合うことや多様な活動を経験することで多様な見方ができることによって、インクルーシブ保育を促進する保育者を養成する助けとなっていることを明らかにした。

キーワード：保育者養成短期大学、多様な授業や行事（活動）、学生、インクルーシブ保育、ビオトープ

1 はじめに

保育を取り巻く社会情勢が変化する中、2018年に幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領という3文章が同時に改定され、その基本的な内容もほぼ同一（整合性を図る）になるように作成（汐見、無藤、2018）¹⁾されたことは、保育の現場のみならず保育者養成の場においても大きな歴史的な意味を持つものである。これからの日本の保育は、多様性（養護と保育と教育の融合・長時間保育・子育て支援等）が求められる時代になり、保育者養成の社会的負託を受けた保育者養成大学、教員の役割は大きく、量的、質的改革が必要となる。

こうした状況を踏まえ、今後の保育者養成に必要な専門知識及び技術を念頭に置きつつ、保育者

養成課程を構成する科目名（名称や授業形態、単位数に加え、目標や教授内容を含む）の見直しが各養成大学等で検討されている。保育者養成における保育者に必要な資質について、「保育所における自己評価ガイドライン」(2018)²⁾では、自己評価の実施により保育士等の子どもに対する理解が深まり、保育を改善・充実するための課題や方策が明確化されること、職員全体で取り組む中で、保育所の課題について共通認識が深まり、保育現場の職員の共同性が高まること、等が示されている。ここで示されている「子どもに対する理解」と「職員の共同性」については、保育者養成においても大きな柱であると考ええる。

保育者の養成教育課程の改訂は、本論の研究主体である植草学園短期大学児童障害福祉専攻（以下、

短大と記す)にとって、これからの保育者養成に向けて、保育者養成側の求める保育者像を問い直し再確認する好機となると考える。そこで、ここ数年に渡って行ってきた短大での授業や行事(活動)の取り組みの内容を洗い出し、多様性を見据えた保育者養成カリキュラムを検討することが必要と考えた。

本研究校の特色となる多様性の意味を考える上でこれまで行ってきた授業や行事(活動)に加え、今年行ったビオトープ「植草共生の森」を活用した活動について分析し、考察する。

【1 参考文献】

- 1) 汐見稔幸、無藤隆「平成30年施行 保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領 解説とポイント」、2018、ミネルヴァ書房
- 2) 厚生労働省「保育所における自己評価ガイドライン」、2009

2 多様性のある授業や行事(活動)の取り組みの背景

短大は、1999年に開校し創立20年を迎える。建学の精神は創立110年となる植草学園(以下学園と記す)の「徳育を教育の根幹として、国を愛し、心の豊かな、たくましい人間の形成をめざすとともに、誠実で道徳的実践力のある人材を育成する。」ことにあり、学生、生徒、園児一人ひとりの人間性を大切にした教育を通じて、自立心と思いやりの心を育むことにより、誰をも優しく包み込む共生社会を実現する拠点となることとしている。現在短大での保育者養成学生は200名となっている。

異なる個性を持った幼児を包み込むインクルーシブ保育を学ぶ一環として、短大では、教育実習の一部は特別支援学校で行う等、特別支援教育にそった授業や行事(活動)を取り入れてきた。しかし、これまで行ってきた授業や行事(活動)の取り組みの内容についてそれらの独自性や関連性について検討する機会がなかった。

3 調査の手続き

調査の場所は、植草学園短期大学である。ここ数年に渡って行ってきた授業や行事(活動)、①特別支援(ボッチャ)、②保育現場で子どもと出会う(行事実習)、③地域との交流(こどもフェスティバ

ル)、④ボランティア活動(こどものまち作り)、⑤自然(ビオトープ)を活かした教育、について調査用紙で担当教員から回答を得る。質問項目は、①授業名、②活動の目的、③対象者、④時期・期間、⑤活動の内容、⑥結果(学生の感想を含む)、⑦考察(担当教員の専門性を活かした取り組みとは具体的にどのような内容か、また、それらを行うにあたって学生にどんな力を必要(ニーズ)として求めているのか、を踏まえた自由記述)である。この調査から得られた回答を分析、考察する。

4 授業や行事(活動)の実際の展開

4.1 特別支援(ボッチャ)

パラスポーツの一つであるボッチャは、重度脳性まひや四肢重度機能障害者のために欧州で考案されたスポーツで、2020年東京パラリンピックでも正式種目になっている。ジャックボールと呼ぶ白い目標球に狙いを定め、赤と青に分かれてボールを転がし、目標球に近づくことを対戦相手と競うスポーツである。ルールや方法が比較的わかりやすく、障害の有無にかかわらず誰でも本気で楽しめるものである。

短大では、入学して間もない1年次のキャリア演習の時間にボッチャを体験し、学生間の関係形成の一助とすることから始めている。

本学園では、学生や特別支援教育担当の教員が中心となり、県内の特別支援学校の生徒を対象にしたボッチャの競技大会「植草学園理事長杯争奪戦」を2017年から開催している。2年次の教職実践演習において、一部のゼミでは改めて競技のルールを習得するとともに、この企画・運営に携わり、合理的配慮を含め障害のある生徒への配慮や理解について、一緒にゲームで対戦をする体験を通して学んでいく。2018年6月に開かれた第2回大会には特別支援学校6校計13チームが参加した。学生との交流試合では、最後の1球で逆転する試合があるなど、特別支援学校の生徒と大熱戦を展開した。

学生は障害のある生徒と共にボッチャに取り組むことを通して、バリアのない条件での人間関係を体験する。「できるーできない」「支えるー支えられる」といった一方向的なものとは異なる関係の中で、共に喜びを分かち合う。「障害の社会モデル」

の学びにつながっていく。

このような体験は、保育において「障害のある子」と出会う際にも活かされる。固定的な能力観で子どもを見るのではなく、多面的な見方ができるようになり、園児間の多様性が尊重される関係形成を目指す原動力になる。インクルーシブな保育や教育を実現する「つながり」について体験的に学ぶ契機になる。

4.2 行事实習について

4.2.1 行事实習とは

行事实習は、2008年より開始し、2011年より「教育実習Ⅰ」で行っている。実習における事前指導の充実を図る為、その中に植草学園大学附属弁天幼稚園（2017年より弁天こども園）、並びに附属美浜幼稚園（以下、附属園と記す）において実習前の1年次における「観察・参加実習」及び「行事实習」を組み入れていくことにした。附属園の夕涼み会・運動会・芋掘り遠足の何れかの園行事に参加することとし、園行事の実際を学ぶことを目的とした。

行事实習は、幼児と関わることはもちろんのこと、附属園の主任教諭によるオリエンテーションを受け、行事の準備からはじまり、保育者の行事への取り組み方や保護者との関わり方を間近に見られる機会となっている。保育現場における体験を通して、保育者を目指す自覚を促している。

また、夏休みに実施されるこども園の「合宿保育」においては、2年生から参加者を募り、園児と1対1のペアを組み、1泊2日を共に過ごすことで、子ども理解を深め、保育者の向上を目指している。

4.2.2 実施の様子

「夕涼み会」では、縁日のコーナーを各自が担当している。学生たちは、浴衣や甚平姿の子どもたちが保護者と一緒に登園して来ると緊張も和らぎ、笑顔で関われるようになった。準備、出店、片付けの中で、保育者は子どもと直接関わるだけが保育の仕事ではなく、安全に子どもが楽しめるように行事を準備していくことも大事だということを学んでもらいたいと考えている。

「運動会」は、保育現場に学生が行ってオリエンテーションを受ける。実際に使用する用具などを確認し、当日は競技に合わせた用具の出し入れや園児

係として各クラスの子どもに対応している。

学生は担当を任された責任から緊張しながらも、笑顔を絶やさないう、そして機敏な動きを心掛け参加していた。子どもたちの一生懸命な姿に感動する学生は多く、保育者を目指す気持ちがますます高まるようだ。

「芋ほり遠足」では、保育者が行う車内のバスレクリエーションを子どもと一緒に体験し、子どもを飽きさせない保育者の姿勢に目を見張り、子どもが芋を掘り易くできるよう、手助けの仕方など実際に行っていく。畑からバスまでは、保育者が「忍者になって移動しよう。」と園児たちに言葉かけをして、忍者の真似をしながら移動していた。他にも様々な保育者の配慮を経験し、行事がスムーズに進められる保育者の仕事を確認した。

「合宿保育」では事前にウォーミングアップとして「遊ぶ会」が実施される。学生は緊張の中にも期待で胸が膨らみ担当園児と初めて対面する。しかし降園時にはすっかり打ち解けていた。合宿保育が楽しみのなると学生からの声も多く聞かれた。

当日は担当園児と寝食を共にし、子どもは学生とお兄さんやお姉さんのように仲良くなったり、時には親のように頼ったりしていた。学生たちが園児に優しく接し、子どもたちも学生を信頼して甘えている姿はとても微笑ましかった。

また、保護者と面談する機会では、子どもを持つ親の大変さを実感し、改めて子どもの命を預かる責任の重さや安全に対する配慮を学ぶことが出来る。保護者への報告会では、学生たちが子どもたちの様子を伝え、保護者からの感謝の言葉に涙ぐむ学生もいた。保護者への報告を通し、保護者との関わりを学ぶことができた。

4.2.3 実施の成果

行事实習では、1年生が初めて実習に臨む「観察・参加実習」に引き続き、期待感が持てるよう事前指導を行った。行事の特色を理解し、保育者の笑顔は、見ている周りも笑顔にする力があること、子どもたちが楽しいと思える環境を作れる保育者になりたいことなど、保育者の姿から責任感や使命感などが芽生え、自らが心豊かに感性を磨くことの大切さを理解できた。

さらに、親から離れて不安を募らせている子ども

たちに寄り添う経験は、子どもの成長に役立つ経験と言えるだろう。オリエンテーションからはじまり「遊ぶ会」「合宿保育」「お楽しみ会」と続く一連の活動は、学生にとっても心に残る貴重な経験となり、保育者への道を大きく前進させている。

4.3 地域との交流（こどもフェスティバル）

4.3.1 こどもフェスティバルの企画

こどもフェスティバルは、緑栄祭（学園祭）の2日間「おもちゃフェスティバル」として、子どもたちに「あそび場」を提供することを目的に、2010年より短大教員3名が開始した。さらに、学生が子どもたちと関わる体験の機会となり得るよう、各ゼミ生を動員した。場所は、学園のL棟センターモールで実施した。2012年より「教職実践演習」の科目の一環として位置づけ、名称を「こどもフェスティバル」に変更し、参加ゼミ数も年々増えた。内容は、電車ごっこ・魚つり・新聞紙プール・ダンボール絵本やプラ板のキーホルダーづくりなど、乳児から幼児、さらには小学生・中学生・高校生までが楽しめる「あそび場」となった。ゼミごとに内容を企画し、子どもたちが楽しいひと時を過ごせるよう、動線を考え、あそび場を配置した。安全への配慮も考慮した上、準備に精を出して当日を迎える。2011年からは、案内状と手づくりの参加カードを作成し、各附属園に全員分を持参した。子どもたちが当日を楽しみに期待感が持てるよう配慮した。また、子育て支援・教育実践センターにも参加カードを配布し、緑栄祭の広報も兼ねて案内をした。

4.3.2 活動の様子

当日の2日間は、学生と教員がシフト体制を組み、交代で子どもたちの対応に当たった。主に学生が子どもたちと関わる場では、保護者は我が子の様子を周りで見守り、成長の一端を垣間見る機会になっている。特に、電車ごっこや魚つりには乳児が多く遊びに来て、ゆったりとした時間を過ごしている。新聞紙プールでは、幼児がダイナミックに遊ぶ姿が見られた。2016年より1年生へ周知し1年生の希望者がスタッフとして参加している。

4.3.3 活動の成果

2年生は様々な実習を経験しているので、子どもたちへの対応も積極的に行える。その場の臨機応変さが求められるために、大いに実践力が養われてい

る。夏休みに附属園の合宿保育に参加した学生らは、担当園児が遊びに来てくれて嬉しい再会となった。子どもの成長した姿に驚かされながらも保護者とも子どもの様子を交えて会話ができるようになっていく自分に気がついたという。

また、1年生は2年生と一緒にグループを組み、先輩の言葉かけや関わり方を目の当たりにすることで乳児から幼児への発達の違いを実感できたという声が多かった。1年生にとっても、子どもの関わり方を学ぶ貴重な体験の機会になっている。

さらに、保護者からは「子どもが飽きずに遊ぶ」「安全に遊べる場」「毎年楽しみにしている」という声が多く寄せられた。孫を連れてきている祖母も多く、地元につながる活動として、地域連携の一端を担っている。

4.3.4 プラ板づくり

プラ板づくりとはプラスチックの板に絵を描き、オーブントースターなどで熱し縮め、キーホルダーなどになるので、一般的にも人気があり、学生の中には作った経験がある者もいた。年々楽しみに来場する参加者が増え、2018年はゼミ生13名で担当し、プラスチックの板を800枚準備した。

まず「タミヤ楽しい工作シリーズ透明プラ板0.4mm厚B4サイズ4枚入り」を用意し、B6に切り、学生が分担したキャラクターを黒マッキーでなぞり、ぬり絵にした。次に安全性に配慮し、四角に丸みを持たせ、キーホルダーにするためにその一つに穴あけパンチで穴をあける。キーホルダー用の刺繍糸を適当な長さに切り、ここまでの作業を11月8日までにいった。一方で、実際にプラ板を焼く作業をし、子どもたちにはどのような配慮が必要かを話し合った。

11月9日の準備日にはL棟センターモールに常設してある机、いすを撤去し、子ども用机、いすを並べ、細かい道具（割り箸、アルミホイルなど）、オーブントースターを設置した。

当日（11月10日、11日）は学生が話し合って決めたシフトで4人ずつが10時から15時まで子どもたちに寄り添い、プラ板づくりに対応した。

当日はプラ板、迷路、シャボン玉、カプラそれぞれのコーナーで子どもたちが思い思いに遊びを展開した。結果として、子どもだけでなく、保護者、障

害者の参加も多く、誰にでも楽しめる空間づくりができたと考えられる。800枚用意したが、2日目2時半頃には終了した。学生の感想からは誰もが楽しめること、子どもたちが熱心に集中している様子、準備は大変だったが、プラ板づくりをしている人々の楽しそうな表情を見てうれしかった、ゼミのみんなで準備し、展開出来て思い出になったなどが寄せられた。中には大人は決まった色で塗っていたが、子どもは想像に任せて大胆な色遣いをしていたと観察する姿、初対面の人々と接し方、会話の在り方を体験できたと述べている者もいた。

このような体験的な学びで子どもだけではなく、多様な人々との関りから実りある学びができたと考えられた。

4.4 ボランティア活動（こどものまち）

4.4.1 活動の趣旨

こどものまちは「すべての子どもたちの遊びでつくられる模擬都市」「まちの中では、子どもたちが主役となって、『仕事』をし、『給料』を得て、それを自由に使っていく営みを通して、まちのさまざま

な遊びが展開する取り組み¹⁾である。子どもたちが、遊びを通して、社会の仕組みを体験し、創造し、学びあうことを目的としたプログラムが、1990年代より海外から日本に伝えられ、各地に広がっている。千葉市では2009年より取り組みが始まり、その後、千葉市の各区に広がっている。植草学園小倉キャンパスで展開される「わかばこどものまち CBT」はその一つである。

4.4.2 実施の概要

植草学園小倉キャンパスで実施されるこどものまち（図1）は、若葉区版こどものまち「わかばこどものまち CBT」（以下、わかばCBTと記す）と、長年若葉区の子育て支援を推進している「わかば子育てフォーラム」による子育て支援の取り組みがセットになって開催されている。こどものまちに入場できるのは、小学生以上、高校生未満の子どものみ。子どもの中には、まちを主体的に運営し、数か月前から準備にあたっているコアスタッフの子どもたち、また当日参加の一般市民となる子どもたちが含まれる。高校生は子どもと大人の間のコトナスタッフとして、また子どもを支援するための大人お



「Ku-Su Ku-Su」を活用した「フードコート」



「お仕事センター」で仕事を探す子どもたち



センターモールでショータイム



新市長が誕生 演説を聞く子どもたち

図1 こどものまち

よび短大生・大学生が支援者として参加している。「兄弟が就学前児である」「子どもだけで参加させるのは、親子お互いに不安」などの理由で入場できなくても、近くで保護者や幼児も参加できる場の設定として、「大人カフェ」「はッピーこども園」、子育てフォーラムによる「ひろば」などが展開される。

開催実績はこれまでに3回。2016年7月18日（月・祝日）の実績では、コアスタッフおよび一般市民の子どもたち（以下、子どもたちと記す）のみで370名程度、2017年7月16日（日）、および2018年7月27日（日）の実績においても、350名程度の子どもたちの参加が確認されている。その他、保護者や幼児、大人の参加者を含めると500名程度の子育て家庭の参加があった。

4.4.3 活動の内容、結果

わかばCBTの特徴は、大学という「環境」を活用している点にある。保育者養成校のキャンパスという「環境」を最大限活用して、学内にあるL棟の1階、Mスタを大きく外に開いた舞台上、ファッションショーやダンスを披露し、保育技術演習室を活用した「はッピーこども園」、教室を活用した「楽校（がっこう）」、学食「Ku-Su Ku-Su」を活用した「フードコート」など、子どもたち自身が大学生活を楽しむ、味わうように、まちの環境が作り上げられている。こどものまちの趣旨の一つに「遊びながら社会を学ぶ」視点があるが、まさに大学生にとっての「学び」の環境を、子どもたちの活動が「遊び」を通して「学ぶ」環境を作り上げている。支援者として参加している大学生にとっても、そんな子どもたちの姿を目の当たりにして、「子どもたちが自分で考えた行動することができることが素晴らしい」「大人が心配せずとも、子どもたちは自分で考えて自分で行動していて、子どもの力は大人が思っている以上だと感じた」「手助けするだけではなく見守るかわりが子どもの力を伸ばすことにつながることを学んだ」等の感想を得ている。

また、大学と地域が連携した取り組みだからこそ、多くの学生の参加がある。例えば、近隣の東京情報大学のゼミにも毎年参加協力を得ている。若葉区およびその周辺地域に在住する高校生の参加もある。多くの大学生、高校生の交流の機会として、また保育者を目指す学生にとっては、子どもが主体的

に学ぶとはどのようなことかを知るための事例と経験を与えてくれる環境となっている。

4.4.4 活動に対する考察

こどものまちは「子ども主体」を大切にしている活動である。子ども自身が試行錯誤しながら「こうしたい」「こうなりたい」と考える場や環境を、子ども主体で作り上げていく。大人はもっぱらそのサポート役である。子どもたちから「大人が口出ししないこと」「大人は子どもにいつも押し付けてくる」と指摘されることも多い。子どもも大人もお互いにどのような距離感で、どのように関係性を持っていくことが、子どもの成長・発達につながるのか、大人にとっても学び、成長になる機会と経験を与えてくれる。

現在、本学大学3年生で、わかばCBTだけでなく多くのこどものまちに携わっている小林美実香さんは、この活動に携わった理由とその効果について次のように述べている。

「元々は幼稚園の先生になりたくて、自分のためになるからと。でもすぐに壁にぶつかりました。一番は大人スタッフたちとの関わりに悩みました。伝えたいことがうまく伝わらないと、たくさん衝突しました。でも人と関わることを諦めなかった。一人一人と向き合い、仲間になってきました。将来は子どもたちの生活に寄り添う保育士になりたい。だからここでは貴重な経験をさせてもらっています。トラブルの対処が一番私を成長させてくれますね」²⁾

日本では保護主義的な子育て観がまだ根強く残っている。これからの保育者を目指す学生たちが、この経験から、新しい保育観、子ども観を生み出してくれることを期待したい。

【4 参考文献】

- 1) 木下勇、卯月盛夫、みえけんぞう「こどもがまちをつくる～『遊びの都市—ミニ・ミュンヘン』からのひろがり」、2010、萌文社、p.14
- 2) ちいき新聞2019.10.19号蘇我版 特集「この人」、「『こどものまち』を支え続けて」記事より一部抜粋

【4 参考文献】

- ・田村光子「大学—地域連携による『わかばこどものまちCBT』の取り組み—多様な子どもの学びの場の必要性についての検討」、植草学園短期大学紀要第18号、2017.3.

5 ビオトープ「植草共生の森」について

本学園小倉キャンパス（大学・短大）には約2万平米の森があり、環境教育や地域交流の場として活用されている。2013年には文部科学省私立学校整備費補助金を得て散策路等の整備を行い、森の一角には水性生物を呼び、蜚が生息し飛び交うことをめざして専門家の指導・助言を得て学生と教職員がビオトープ（小川や田んぼ等）の造成を行ってきた。森の一角に小さな棚田が完成し、2013年5月22日には初めての田植えが行われた。さらに、2014年にビオトープは「植草共生の森」と命名されその造成を開始し、5月22日にコナラの植樹を行った。「植草共生の森」（図2）は、学生の教育活動の場として利用すると共に、地域の子どもの学習、地域住民、多世代交流の場とすることをめざしてさらに整備を進めている。

5.1 子どもと出会う「植草共生の森」

5.1.1 授業の概要

敷地内に「植草共生の森」があることで、「自然体験の場所」「自然環境について学ぶ場所」「いのち

の大切さについて学ぶ場所」が確保されることになり、附属園の子ども達の遠足や各授業やゼミ等で徐々に活用されるようになった。しかし、実際には本研究の対象学生は、これまでの授業や活動の中で「植草共生の森」の清掃や散策をする機会はあったが、雰囲気を楽しむ程度に留まり、ビオトープそのものを学ぶ授業は経験してこなかった。そこで、2018年度1年生後期の授業「保育内容演習 環境」の中で、子どもと一緒に自由に遊ぶ活動を取り入れた。附属園の子ども70人が「植草共生の森」に遠足で来る時に、学生が「植草共生の森」の遊びの援助を行った。学生と子どもはグループを作り共に活動した。

5.1.2 期間と授業日

本研究の導入を2018年10月22日（1コマ）、10月29日（2コマ）、11月12日（2コマ）を行い、展開を10月19日（2コマ）合計7コマで行った。

5.1.3 対象者

「保育内容環境」15回の授業の中で本研究に参加した児童障害福祉専攻1年生100名である。

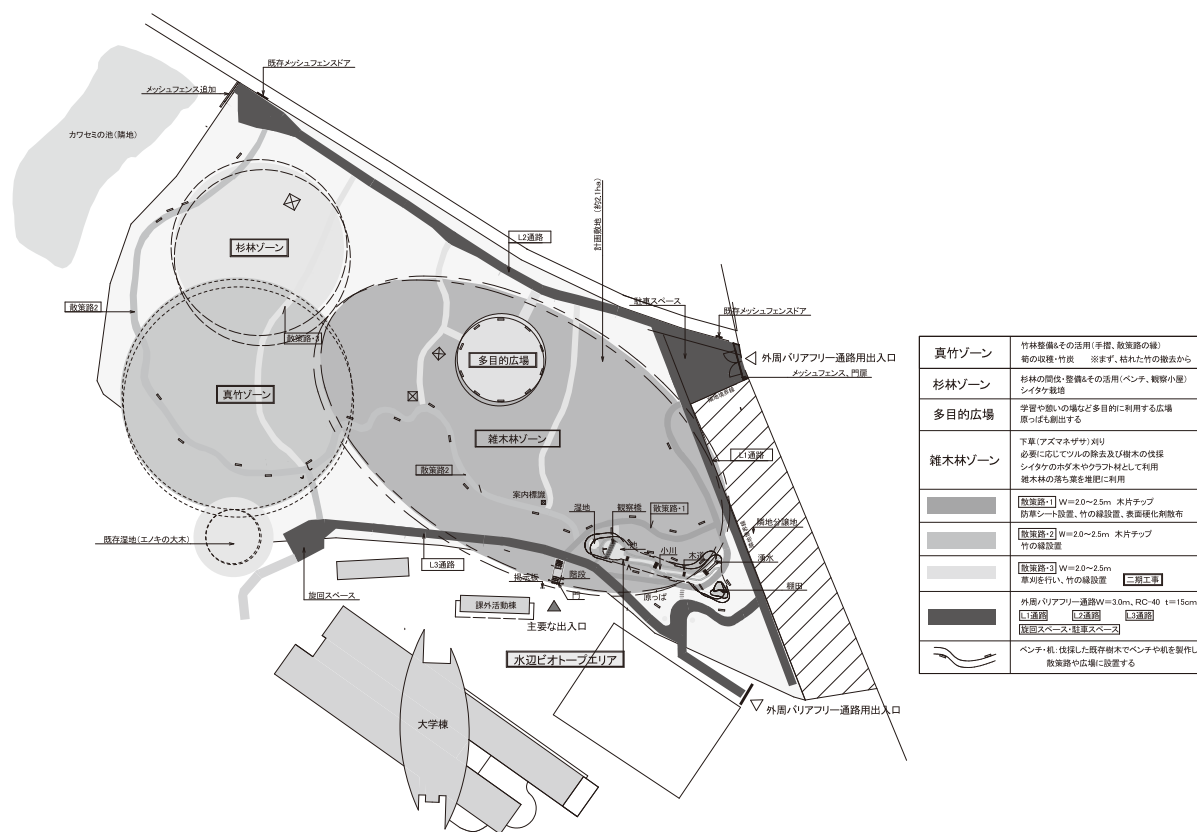


図2 「植草共生の森」マップ

5.1.4 授業の内容

- ① 1回目（2コマ）導入—手作りの虫かごと虫取り網を作り、「植草共生の森」に行き、自由に散策し遊ぶ（バッタ等の虫の採集やツタのブランコ等）。
- ② 2回目（2コマ）導入—ビオトープ設計士 横田耕明氏を特別講師に招き、ビオトープの意味や種類、里山について学び、「植草共生の森」の動植物についての講義を受けた。その後、実際に「植草共生の森」に行き動植物について学んだ。
- ③ 3回目（2コマ）展開—「植草共生の森」で子どもと遊ぶ。10時から11時、子どもと学生の14グループを作り、散策、虫取り、ツタのブランコ、シャボン玉やかけっこ等の自由な活動を行う。

5.1.5 活動終了時の感想について

活動終了時にA4サイズの紙に「学生自身について」と「子どもについて」の感想を自由筆記してもらい、その場で回収した。集計方法は、おおよそのカテゴリーに分け（ ）内に人数を示した。

【学生自身の学び】

- ・子どもと虫を見つけ、草木の名前を覚えることで学んだ。(77)
- ・子どもが鬼ごっこなどで元気に走り回っていたので（子どもと関わることで、子どもに合わせて）一緒に身体を動かした。(22)
- ・学生自身が普段動かない体や筋肉を動かした。精神的な刺激になった。(13)
- ・ビオトープでゆっくりと自然に触れ、鳥の声を聞き観察し自然に関わることもできた。楽しんだ。(12)
- ・ビオトープで虫網を使い、沢山の虫を捕った。どんな虫や植物があるのかを知った。(8)
- ・自然とのふれあいをあまり経験したことがなかった。ビオトープの経験は貴重だと思った。(8)
- ・子どもに虫を捕まえてと言われて困った。(6)
- ・ビオトープを去るときに虫を逃がすことを伝えた。(3)
- ・子どもと一緒に、虫、花、草に触れることができた。知ることができた。(2)
- ・虫を持つときは、そっと持つことができた。(1)
- ・虫が苦手だった。虫に触ることが出来なかった。(1)

【子どもの遊び】

- ・ビオトープで木に登り、虫取りやブランコ、芝生で鬼ごっこや縄跳び、ボール遊び等をして思いっきり体を動かして遊んでいた。(36)

【子どもとビオトープの関わり・関心】

- ・ビオトープの自然に関わる。ビオトープの虫に興味を持っていた。蔦のブランコやターザン（蔦にぶら下がる）で遊ぶ。森の探索や虫取りをしていた。ビオトープの虫や花に関心を示しの名前を覚えようとしていた。(21)
- ・虫を捕まえて、帰りは逃がしていた。その体験から命の尊さを考えたのではないか。弱っている虫を放し、死んでいる虫を土に埋めることができた。(13)
- ・虫を捕まえるのに喜んでいて。(12)
- ・虫を捕まえたときに傷つけないように優しく持っていた。(1)
- ・虫のいる場所を知る。(1)
- ・ビオトープの道を歩きながら、「さっき行った道だね。今度は違う道を行こう。」と考えながら行動できていた。(1)
- ・弱ってしまった虫を捕まえていた。(1)
- ・バッタの足を取るなど、残酷な場面があった。(1)

5.1.6 授業の振り返り

今回の授業は、ビオトープの専門家である「植草共生の森」を設計した横田氏が講義と演習を担当し、学生がビオトープについての知識を身につけた。その後に自然環境を体験的に学び、子どもと出会うことで保育構想の仕方を学ぶ授業となった。学生の感想からは、学生自身が自然環境に触れたことへの喜びや、虫を苦手とするような自然体験の不足の自覚などが多かった。子どもの自然に対する興味関心を知ったことが主な内容だった。

5.2 ビオトープを活用した「音の世界」展覧会、保育内容演習（表現）

5.2.1 授業の概要

音楽表現と造形表現の分野横断型表現活動を通して、子どもの表現についての理解を深めるとともに、保育者としての自身の感性を高めることを目的とする。対象者は、児童障害福祉専攻2年生のうち当該授業（2018年6月X日・Y日）に出席し、研究

への参加に同意した学生85名である。

①1時間目 導入・主活動—絵画制作

本学敷地内にある「植草共生の森」に出かけ、そこで聴こえる「音」に意識を集中する。聴覚で捉えた「音」を題材として、各自でテーマを設定し、そのイメージを水彩画で抽象的に表現する。導入として、事前にプロジェクト・アプローチの事例（モーツァルト・プロジェクト^{注釈}）を紹介し、この実践のねらいと方法を理解したうえで取り組む。授業の最後に、創作活動から考えたことについての自由記述を課す。

②2時間目 展開—展覧会の開催

全員の作品を音楽室の廊下に展示する。展示は匿名とする。匿名の理由について、「誰が描いたか」という情報は表現から感じる印象に大きく影響することを説明する。例えば、「あの友人はこのような表現をするのか」等、鑑賞者が作者に日頃抱く印象を基準にして観てしまうものである。こうした先入観を

排除し、純粹に目の前の作品を鑑賞したときの心の動きを見つめることをねらいとすることを説明した。

③2時間目 まとめ—活動の感想記述

絵画制作と展覧会の活動を振り返り、自身の心の動きや気づき、学んだことを自由に記述し提出する。この記述の目的は、保育者となる自身の先入観や感性等が、子どもの表現活動の展開を大きく左右することに気づくことである。この目的についても説明したうえで、作品には番号のみを付し、作者による解説文を添付して展示する。2クラス85名分の作品を互いに鑑賞し、印象に残った作品についての批評を提出する。



図3 作品1

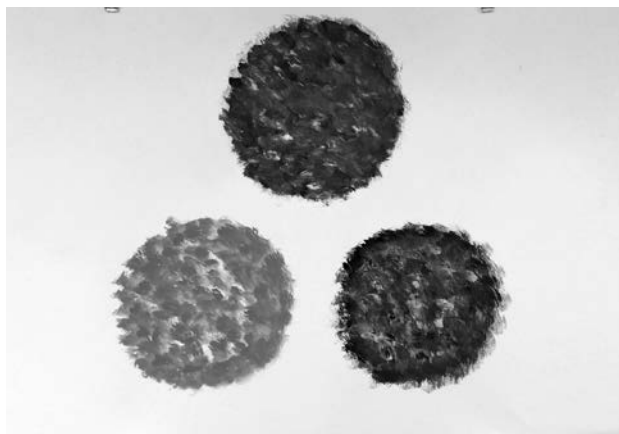


図4 作品2

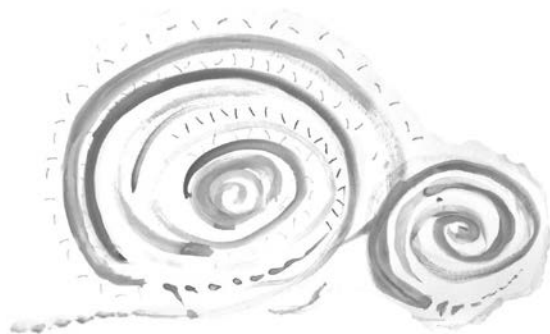


図5 作品3



図6 作品4

5.2.2 完成作品の特徴

特徴の異なる代表的な作品を挙げる（図3～6）。全学生が同じ場所に行って音を聴き、そこで抱いた印象を表現したが、全く異なる表現作品が生まれた。デカルコマニーや吹き流し等、造形表現の授業で学んだ絵画の技法を応用した作品も見られた（図6）。

5.2.3 批評文の特徴について

印象に残った作品の選択については、自分と似た表現よりも、自分には考えつかない発想による表現作品を選択する傾向にあった。

批評文においては、作者の解説文と作品とを照らし合わせて鑑賞し、自分には無い発想であるが作者の意図を知って感心・感動した旨の記述が多かった。

5.2.4 活動終了時の感想について

実践後の自由記述においては、聴覚で感じた印象を視覚的に表現することについて、「難しい」という感想が多数あった。その理由として、完成例が示された具体物の制作経験に対し、例が示されない自由な抽象表現の経験が少ないことが考えられる。難しいと感じながらも取り組んだ結果、完成した作品は、一つとして同じものが無かった。

今回の課題設定では、こうした結果になることは必然的であり、誰もが予想出来たはずである。それでも学生はこの結果に改めて驚き、新鮮さや面白さを感じたことが、自由記述から読み取れた。また、展覧会において他者の表現に接すると、日頃、共に学んでいるクラスメイトが自分には無い発想をしていることについて「面白い」と感じ、多様な表現に対する尊重の気持ちが生まれたことが、記述から読み取れた。さらに、多様な表現を尊重する自身の姿勢について、「将来、保育者として子どもの表現に対しても持ち続けたい」という記述も複数あった。

本実践の成果として、次の2点が挙げられる。①音楽表現と造形表現の分野横断型表現活動は、子どもの多様な感性・表現について理解を深める上で有効である。②学生が友人の多様な感性・表現に接する体験は、保育者として子どもの自由な感性・表現を尊重する姿勢の大切さに気づくことへ繋がる。こうした成果から、本実践は学生が子どもの感性・表現を尊重する姿勢を形成する機会となったといえる。

5.2.5 今後の課題

筆者は保育者に必要な資質について、①子どもに対する理解と、②保育者の共同性を軸に、つぎのように捉え、授業を行っている。①子どもは、人間に本来備わっている力、すなわち、想像力・創造力・表現力等の片鱗を常に示している。②保育者は、多様な視点から常にこれらの片鱗を見逃さないよう努め、報告し合って共有したうえで、共通理解のもとに共同で保育の計画を立てるべきである。

この考えを踏まえ、本実践の今後の課題として、「難しかった。だけど、楽しかった。」という感想が多かったことに着目したい。今回は感想を提出するところで終了したが、「難しい活動が楽しいのはなぜなのか」ということをテーマに対話の時間を設けることにより、「試行錯誤する」とか、「没頭する」ことの重要性と必要性についての理解がより一層深まるであろう。また、本実践において、学生は身近な友人であっても多様な表現を知った。これは、複数の保育者の多様な視点により、子どもを多面的に捉えることができることへの理解へと繋がる。子どもを多面的に理解することは、家庭内の親子関係では得難い集団保育ならではの利点であり、保育者および保育所等の役割でもあることを伝えたい。こうした学習要素も織り交ぜながら、学生が「子どもの表現」に関する指導案を検討する際に、「子どもが遊びに没頭する要素および環境設定の工夫があるかどうか」という視点を身につけることを学習到達目標としていきたい。

【5 注釈】

・モーツァルト・プロジェクト

参考文献において紹介されているプロジェクト保育の事例である。1人の子どもがモーツァルトの絵本を読み、人物や音楽に興味をもったことがきっかけで始まったプロジェクトである。遊びの過程で、音を記号で記録する「楽譜」へと興味関心が及び、友だちとともに生活の中の様々な音に着目し、その音を楽譜に見立てた絵画で表現する遊びへと発展していった。

【5 参考文献】

・磯部錦司・福田泰雅「広げ、深める～モーツァルト・プロジェクト」『保育のなかのアート、プロジェクト・アプローチの実践から』、2015、小学館、pp.94-100

6 考察とまとめ

本研究では、近年短大で行われてきた保育者養成における多様性を見据えた授業や行事（活動）について検討した。多様な状況に応じられるようになるためには、まず多様な活動を経験することが大切である。多様な活動として、①特別支援（ボッチャ）、②保育現場で子どもと出会う（行事实習）、③地域連携（こどもフェスティバル）、④ボランティア活動（こどものまち）、⑤自然を活かした教育（ビオトープ）を取り上げ、考察を試みた。

ボッチャでは、障害のある人に合わせるための活動を行った。このような経験が、保育において「障害のある子」と出会う際にも、固定的な能力観だけで子どもを見るのではなく、多面的な見方ができるようになり、園児間の集団形成においても、多様性が尊重される関係形成を意図するよう原動力になる。インクルーシブな保育や教育を実現する「つながり」について体験的に学ぶこととなった。

行事实習の「夕涼み会」「運動会」「芋掘り遠足」では、多様な園行事に参加することで、保育の多面性の実際を学ぶ機会となっている。実習前の初期段階で保育現場の雰囲気を経験し、異なる行事に合わせて学生仲間と共に行事での多様な役割を担い、子どもとの様々な形での出会いを重視した内容である。

こどもフェスティバルは、2年生を中心に、子どもだけでなく、障害者、高齢者、保護者など様々な人との出会いを視野に入れた行事となっている。また、地域との繋がりが視野の広がりを促している。こどものまち作りは、多くの大学生、高校生の交流の機会として、また保育者を目指す学生にとっては、子どもが主体的に活動する時の素晴らしさを学ぶ機会となっている。

さらに、今年度新たに行った授業は、1年生のビオトープに対する学びと「植草共生の森」での子ども

と共に遊ぶ体験であった。そこで学生自身が自然体験の不足を自覚し、子どもの自然に対する興味関心を知った。

さらに2年生では「植草共生の森」で感じた「音の世界」を絵で表現し、様々な感じ方に触れるという活動を行った。曖昧な関連から生まれる多様な独自性を他の学生と共有することで、保育者にも多様な視点があること、子どもにもその可能性があることを学んだ。お互いに異なるからこそ、共通理解の学びを行う必要があることを理解したと思われる。

短大は、インクルーシブ保育の学びを各々の教員の授業の中に取り入れる等して、子ども観が培われてきた。そのことを土台に、学生が自分自身の感性を磨き本質に触れること等、学びの質を視野に入れた授業が始められつつある。

今回、これまでの授業を振り返り検討した結果、それぞれの授業や活動を知る機会となった。それらはバラバラに存在するのでなく全体としてみると多様な人や子どもとつきあい、多様な活動を経験することで、多様な見方が求められるインクルーシブ保育を促進する保育者を養成する助けとなっていることが分った。

今後とも、各授業や活動で多様な機会、方法を通じて、学生に多様性に感動し尊重する姿勢を形成していくことがますます必要となっていくものと思われる。そのために、多様な活動を通じていかに多様な経験や感動、学びを学生が獲得していったら良いかについて今後更に追究していくことが必要である。

謝辞

本研究は、平成30年度植草学園短期大学共同研究の助成から補助をいただきました。ここに記して感謝し、お礼申し上げます。

